

山縣有朋閩係文書

福原乃木兩雄書簡

山縣有朋

意

22

福原乃木兩雄書簡

福急乃木而雄者續



十二枚

16

125



225792

山縣有朋公傳記編纂所

山縣有朋公傳記編纂資料

福原乃木為雄書牘



225792



福原乃木為雄書牘

序

為全

桂氏見示其所藏福原乃木為雄氏明治九年往復書翰今讀之感不能已余當時為陸軍卿詳知其事情為雄之言共足見其精神而在矣

大正八年六月題

會 電 口 口

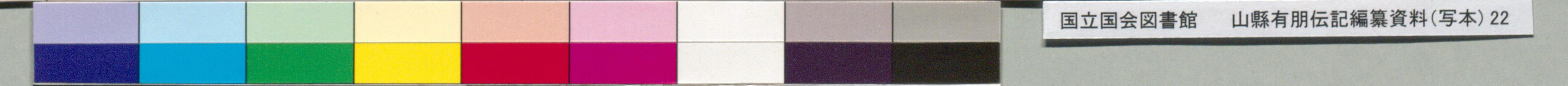
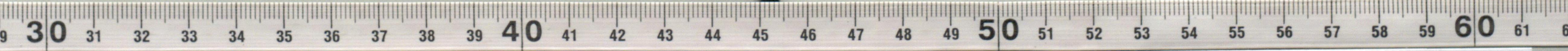
山縣有朋公傳記編纂所



大正... 山縣有朋傳記編纂資料(写本) 22

福原和勝(乃木少将ヲ誅責シタル書)

陸軍大佐福原和勝書ヲ陸軍少将乃木
希典足下ニ呈ス僕足下有旧已久矣之
ニ加ルニ同僚ノ好ヲ以テス而テ足下
夙ニ武名ヲ以テ世ニ現ワレ僕ノ最モ
欽慕スル所ナリ然ルニ昔日肥筑並長
州名處士族動乱ノ際ニ方リ足下ノ所
為ニ於テ聊カ遺憾ナキ能ワズ因テ之
レヲ左ニ陳述シ以テ足下ニ質セント



欲ス或ハ貴意ニ觸ル、
カラスト虽モ朋友ノ義ニ於テ敢テ黙
止シ難シ請フ僕ノ友情ヲ洞察シ其唐
突々礼ヲ答ムルコト勿レ僕能本ノ警
報ヲ聞テヨリ以來日トシテ陸軍師ノ
許ニ至リ該地ノ景況及ビ官軍兵備ノ
位地ヲ尋問セルハ無シ而テ一日熊本
變動ノ際兎玉少佐ノ所為ヲ詳悉ニ聞
ク、及ビ覺ヘズ膝ヲ撃テ嘆美セリ何
トナレバ足下知ル所ノ如ク最モ依頼

新原正徳(少佐)ノ景況ヲ尋問ス

3

スル而ノ將校許多ニ失スト虽モ更ニ
屈撓セズ少佐が残兵ヲ集合シ直キニ
筑後等ノ処ニ賊徒追討ノ為メ援兵ヲ
乞フ少佐兵ヲ顧ミズ之ヲ分遣シ速カ
ニ追討ノ功ヲ奏シ實ニ其職掌ヲ尽セ
シハ論ヲ俟タサル而已ナラス兵備駐
引等ノ宜ヲ得タルハ古名將ニモ恥
サル可シト虽モ過譽ニ非サルナリ畢
竟少佐が此ノ如キ事業ヲ成セシモ平
生武剛ノ嗜ミ深ク且ツ兵事ニ志篤キ

力故ニ然ルナリト信ズルナリ而シテ
側ヲニ聞ク諏訪大尉モ亦一中隊ノ少
兵ヲ提ゲテ能ク萩ノ賊ヲ挫キ以テ陸
軍大尉ノ名ニ負カサリキト之ニ因テ
間接ニ我輩朋友ニ許多ノ榮譽ヲ與ヘ
タリ然ルニ足下引率スル所ノ兵負ヲ
聞フニ一聯隊ノ精兵有リ而テ豊津ノ
小争闘ヲ除ク外未だ嘗テ一小戦外モ
聞カサリシニ却テ大阪鎮基工向テ援
兵ヲ乞フント聞キ(素ヨリ事急率ノ際

7

ナレバ敢テ足下ノ為ニ信ゼザリシカ
追々其報ノ確實ナルヲ見出シ)僕誠
ニ驚嘆ノ至リニ堪エザリキ何ントナ
レバ敵人ニ向ヒ一矢ヲモ放タズ而テ
先ヅ助ヲ他ニ求ムル者古ヨリ未だ聞
カサル所ナリ而シテ足下若年ニシテ
且官ハ少侍ニ在リト虽も名聲已ニ世
ニ聞エ才能衆人ニ過ケルヲ以テ聯隊
長ニ撰ハレタルハ僕竊カニ陸軍所ノ
足下ニ望ム所有テ然ルナリト信ズル



ナリ且又古今戦争ノ尸史ハ備テ措キ
試ニ近ク戊辰北越ノ役ヲ回顧セヨ
勝敗ハ素ヨリ兵ノ多寡ニ因ラス是下
其役ニ在ラズト虽モ我地ヲ經タル足
下ノ友人ヨリ親シク我軍ノ顛末ヲ聞
シナル可シ当時官軍僅ニ奇報ヲ隊
及薩兵ヲ保テ二千人ニ滿タサリシ加
賊兵ノ衆且強ナルハ無本ノ羊賊及蘇
ノ賊徒ト目ヲ同フシテ語ル可ラズ然
レモ官軍常ニ勝利ヲ得タルハ何ゾヤ

佐ナシ只管士卒死ヲ期シテ生ヲ計ラ
ズ戦略予メ確定シ兵ノ多寡ヲ問ハズ
故ニ我陣ニ臨ニ整ニ肅ニ毫モ狼狽ノ
色ナシ僕斯ク曰ハズ是下必ク答エシ
戊辰ノ兵ハ壯士ナリ士族ナリ賊兵ニ
非ラサルナリ曰ク是下ノ説ハ是ニ似
テ非ナリ何ントナレバ之ヲ佐賀ノ役
ニ徴スベシ該地ノ賊ヲ平ゲタルハ何
兵ゾヤ賊兵ニ非ズヤ是レ賊兵ノ強ハ
士族ニ譲ラサルヲ見ル可シ且又兵杖

署械彈藥等ノ利用得失及ビ將軍卒ノ
智愚勇怯並兵隊ノ練不練ヲ見ルニ孰
レカ勝レルゾヤ一トシテ彼の羊賊カ
官兵ニ及バ者ナキハ足下ノ能ク熟知
スル所ナラズヤ於是僕等足下ノ大兵
ヲ擁シテ動かサルヲ恠ニ且ツ何ノ為
メニ大阪鎮台工而テ援兵ヲ乞フレシ
ヤ是最モ解ス可カラサル所ナリ足下
若シ山口名賊徒蜂起ノ期ヲ前知シ之
レニ予備セシカ為メ斯ク注意セシモ

6

ノト曰ハシ平柳僕等下ノ為ニ取ラサ
ル所ナリ何トナレバ是等ノ事件ハ陸
軍卿ノ要策ニ在テ足下ノ任ニ非ラサ
ルナリ若シ又之レヲ敢テセバ其分ヲ
起工或ハ過慮ノ甚シキ者ト謂ワサル
可ラズ况ンヤ一水ヲ隔ツレバ足下ノ
管内ニ在ラズ廣島鎮台ノ後轄ニ於テ
ヲヤ故ニ縦令通浦又ハ馬関ニ賊徒蜂
起スト虽モ足下兵ヲ擁シテ傍着スト
モ可ナリ誰カ能ク得テ是下ヲ責メン

ヤ然レモ九州地方ニ於テハ殆ラ不能
マテ是下其責ヲ免カレ能ハズ僕斯ク
喋々論ズル者ハ先被足下ノ舉動ニ依
テ種々ノ悪声ヲ来夕ニ聊カ長州人ノ
面目ニモ關係ナキ能ハズ况ニヤ足下
ハ僕ト同郷同里ノ人ナルニ於テ豈来
者ノ為メ已往人トテ舉テ一言セサレ
可ンヤ請フ足下速カニ返簡ヲ賜ヒ僕
ヲシテ疑念ヲ釋カシメバ幸甚ナリ
明治九年十二月二日

乃木ハ當時少佐下歩十隊隊長たり
福原ニ對シテ詳細ニ傳ツテ其無信ヲ述ベたり

希典白福原君足下一辱書教示セラレ快
意ノ厚中謹テ諾焉又言可キ言ナシ之
ニ答フ宜シク以武門之道而已矣之レ
一日モ急慢スベキニ非ズト虽モ当地
ノ情况人ヲ撰ンテ一言セサルヲ得不
昔時管下ニ紛紜アル其初ニ當リ丁ノ
熊本ニ費セバ蘇ノ之ニ應ニ米柳佐倉
秋季ノ士族其旨ニ起テ小倉福原ノ為



官所ヲ顛覆セシト謀ル者ヲ偵知ス肥
後ノ賊起ルヲ聞キ既ニ于時ヲ経ルモ
未ダ他人之ニ應スルヲ聞カズ或
ハ彼ノ詐謀我ヲ誘フ者ナランカヲ疑
フト虽モ(事ヲ報知スル者將校ノ手ニ
出ザルヲ以テナシ)機ヲ失フ可ラサ
ルヲ以テ半大隊(青山大尉之ヲ率ス)ヲ
筑ノ松崎石櫃ノ間ニ遣リ本營ニ声援
シテ米柳秋ヲ壓セシム此半大隊末如
該地ニ幸セザルニ秋月ノ士族五百余

八月八日... 秋月ノ士族五百余

名肥賊ニ應シテ則チ遂前地方ニ進入
スト於是カ賊謀恰モ我察スル処ノ如
シ乃チ又稀宮ノ一中隊ヲ秋月ニ進入
セシメ又半大隊(津下少佐之ヲ率ユ)ヲ
秀春ニ向テ賊ニ當ラシム此ニ於テ則
チ慶ノ邊境ハ秋賊ノ尤モ依頼スル処
亦必不賊ニ應ズベシ苟モ其飛チヲ見
ハサバ希典自ラ進テ之ヲ討チ應義ノ
余力ヲ以テ秋月賊ヲ蹂躪シ又進シテ
馬旗ヲ後筑ノ高良山下ニ建テ一周年



留年自ら教育結成スル処ノ比ニ大隊ノ兵ヲ提分テ米柳庄等ノ田賦ト兵戦ニ兵若金穀傷兵ノ通出應援ハ之ヲ福言ニ取ルヲ至便ナリトス故ニ福言ノ三中队ハ暫ラク之ヲ動かサシムルナリ軍隊ノ他ヨリ来リ會スル者馬圍小倉百ニ集ルトキハ復夕背後ニ顧慮ナシ豈ニ一世ノ快事比時ニ至レリ職ニ馬上ニ整テ恨ム処ナシ已ニ命ジテ軍中ヲ撤除セシメ馬ヲ飲テ偵報ヲ待リ偶

9

横関佐井田少将等比地ニ来ルヤ少将吉沢副監督ヲ正テ委津士族ノ現ニ小倉地内ニ潜入シアル者ヲ集メ利害ヲ論説シテ之ニ教ヘ其際云フ多キモ一ノ露ハレサルニ及テ終ニ竭ム邦家ノ為真ニ賀スベキナリ肥筑ノ留後レテ事ヲ謀ル者アルモ大ニ至ラズ慮ル処ハ尽ク画餅ニ属セリ區々ノ心志何堪工ニ義況ノ終ニ用友ニ語ルヘキナシ赧然疎濶今日ニ至ル者願クハ一夕ビ



当地ノ情况ヲ察セヨ策ノ中ヲサル者
ハ敵ニ欺カルト同一般ナリ其分ヲ
起ヘ或ハ過慮ノ甚シキニ失シ悪声遂
ニ師兄用友ノ面目ヲ汚辱スルニ至ル
男児生テ巴ニ名ヲ成サス何ゾ再ビ用
友ニ対セシ足下ノ厚情希典ヲシテ他
人ノ悪唾ヲ蒙ル多キニ至ラザルニ及
ンテ此教書ヲ辱フス豈欣然之ニ答フ
ルニ武門ノ道ヲ以テセザル日可シヤ然
ルニ敢テ恥ヲ忍ンデ一十余日ヲ猶豫

10

ニ更ニ足下ノ一教ヲ煩ハザルヲ得
サル者アリ始メ肥賊ノ散乱スル者佐
賀ニ走ルヲ以テ一大隊ヲ柳河ニ出シ
テ之ヲ要撃スベキヲ求ムル者アリ之
ヲ偵スルニ其實ヲ得ル況ニヤ僅々敗
餘ノ數賊潜走スルヲ以テ大兵ヲ動ス
トキハ却テ米柳ノ姦徒ノ笑ヲ来サン
ト尚再報ヲ待ツ果シテ然リ終ニ兵ヲ
柳河ニ進メ秋月賊ノ未だ起ラザル
ニ稍其兆アルヲ以テ兵ヲ乞フ者アリ

縣官未だ之ヲ説諭也。不警。未だ之ニ
死ヤ不。兵未だ遣ル可ラ不ト云テ敢テ
動カ不。希典平生ノ猖狂ニツノ者今
日ニ至テ或ハ他人ニ怨ミナキ能ザラ
ンカ且ツ書中細カニ罪ヲ數ヘ而シテ
尚疑意アツテ未だ解ヤ不トスル者此
疑意ハ之レ或ハ他ノ一点ニ在ルナラ
ンカ。希典ノ去年此職ヲ奉スルヨリ
居常寢食ノ間ト虽モ意ヲ此騷乱ノ因
起スル心ニ注カザル。及ナク終ニ骨肉ノ

11

親ヲ絶テ已ヲ知ル者ノ為ニ報スルア
ラントスルハ夙ク已ニ足下ノ知了也
ラル、処ナリ然リト虽モ昔日ノ失錯
相踵ギ今日志ノ達ヤサルヨリ或ハ察
ジテ其旨ニ入ル者アルアランカ此ヲ
以テ嫌疑ヲ師兄用友ニ得ルトキハ死
スルノ後ト虽モ恨ミナキ能ハ不。死期
ヲ猶豫スルハ耻ノ之ヨリ大ナルハナ
シ之ヲ敢テスル者ハ止ム能ハザル也
アレバナリ伏シ希クハ更ニ一答ノ教



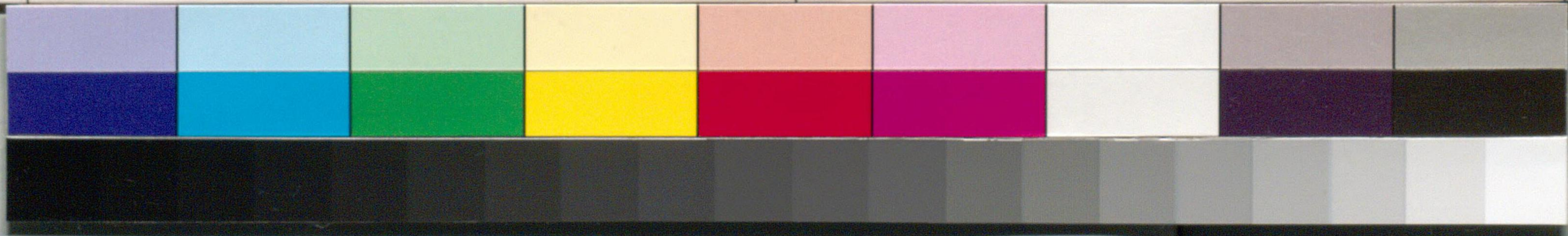
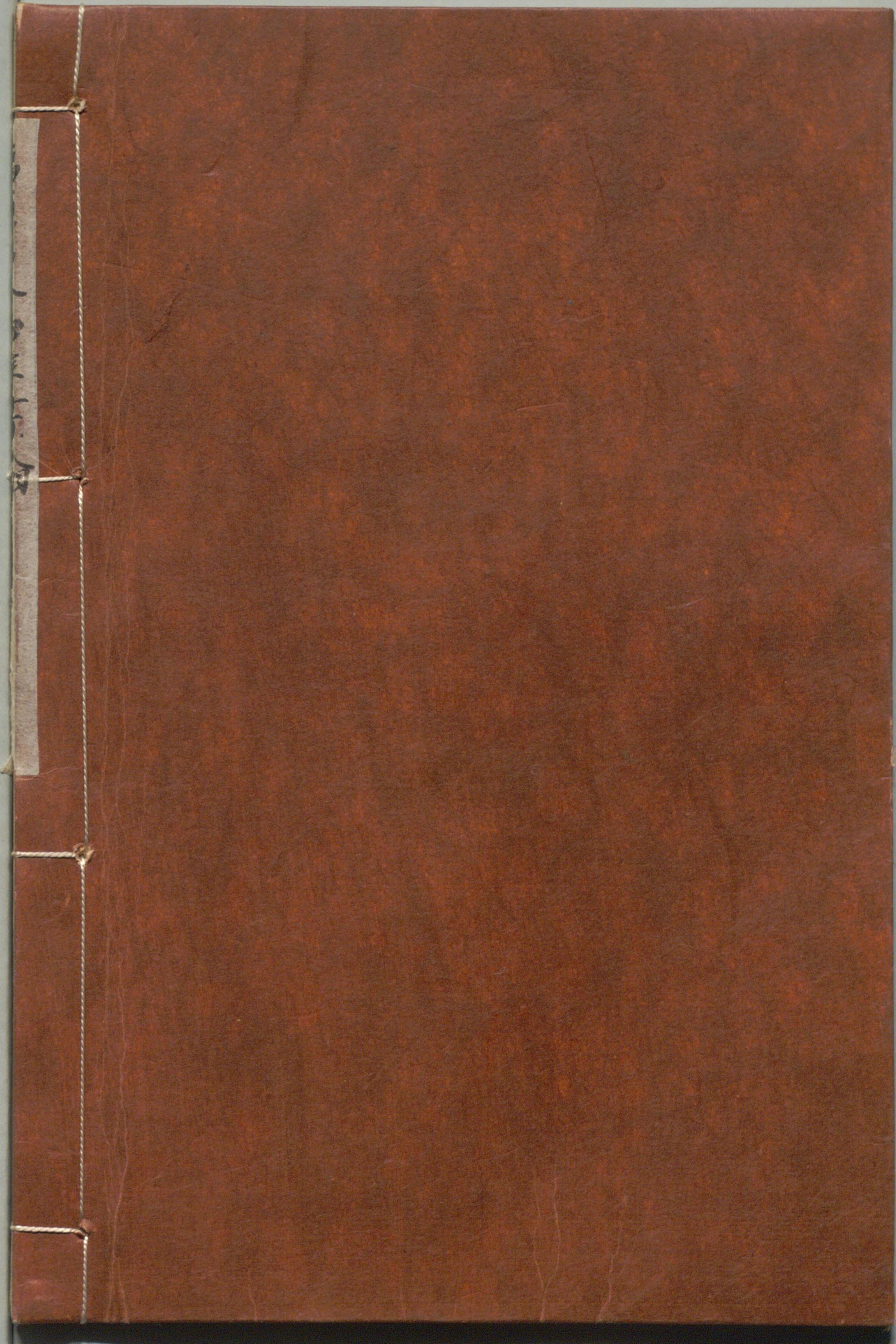
書ヲ賜ヘ復再三ヲ煩ハスニ非ハズ
其意ハ深ク不遺味アリト云フ
其意ハ深ク不遺味アリト云フ
其意ハ深ク不遺味アリト云フ
其意ハ深ク不遺味アリト云フ
其意ハ深ク不遺味アリト云フ
其意ハ深ク不遺味アリト云フ
其意ハ深ク不遺味アリト云フ
其意ハ深ク不遺味アリト云フ
其意ハ深ク不遺味アリト云フ

12

跋

經曰士有爭友則身不離於令名今見福
原乃木為旌之書翰互披瀝赤誠往復論
議毫多忌憚而其留友情真摯理義明晰
足使鬼神感焉真可謂士道之精華矣

大迫尚敏謹誌



国立国会図書館 山縣有朋伝記編纂資料(写本) 22